

中学校・高等学校教員養成課程（保健体育）に在籍する学生の 教師効力感の特徴

— コロナ禍における実習指導を通して —

A study on the characteristics of teacher efficacy of Students in junior high school and
high school teacher training courses (health and physical education)

— under COVID-19 —

体育学部体育学科

平田 佳弘

HIRATA, Yoshihiro

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

岡山県立大学保健福祉学部

京林由季子

KYOUBAYASHI, Yukiko

Department of Health and Welfare Science

Okayama Prefectural University

Abstract : In this research, we aim to study to examine the teacher efficacy of students in junior high school and high school teacher training courses (health and physical education), under COVID-19. The subjects of the survey were students of the 2020 junior high school and high school teacher training course (health and physical education). We conducted a questionnaire survey consisting of 44 items in four areas: (1) teacher efficacy, (2) occupational self-consciousness, (3) anxiety about practical training, and (4) anxiety about COVID-19. The subjects of the analysis were 88 people who responded to both the pre- and post-survey of the educational training. The score of “teaching / guidance” of teacher efficacy was significantly higher after the educational training than before the educational training for third graders, physical education department, and aspiring civil servants. The score of “class practice ability” of anxiety about teaching practice was significantly lower after the educational teaching practice than before the educational teaching practice in all grades, departments, and career paths. The score of anxiety about COVID-19 was significantly lower after the educational training in the 4th grade than before the educational training. As a whole, the teacher efficacy of students before the educational training was relatively high. The teaching practice guidance in 2020 was centered on online lessons, but it is possible that the ingenuity of the teaching method improved the teacher efficacy and reduced anxiety about teaching practice.

Keywords : teacher efficacy, educational training, junior high and high school teacher training course

I. はじめに

新学習指導要領（平成29年3月公示）が移行期に入り、小学校では2020年度から、中学校では2021年度から全面実施され、高等学校では2022年度より年次進行で実施される。新学習指導要領では、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が大きな改訂のポイントであり、我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化

により、児童生徒の知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育てていくことが重要とされている。保健体育科においても「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた授業改善が求められ、さらに現行学習指導要領から、ダンス、武道が必修化になっている。一方で、近年、教員の多忙化が問題となっており、2013年の経済協力開発機構（OECD）の「国際教員指導環境調査」（TALIS）では、加盟34か国と地域の中学校教員の週当たりの勤務

時間は、参加国平均38.3時間であるのに対し、日本の教員は53.9時間であり世界最長であった（国立教育政策研究所，2013）。つまり、時代の変化に伴い授業時間や内容は増えており、さらに障害に応じた指導、日本語の能力等に応じた指導、不登校など、授業で配慮すべき事項も増えていることから、教員の多忙化はさらに増すと考えられる。

渡邊・中西（2017）は、『多忙かつ精神的にも負担が大きい教員という職においては、職務内容に立ち向かうにあたり、「与えられた課題を自分自身がうまくできる」という自身の行動への信念が極めて重要であると考えられる』と指摘している。このような「教育場面において、子どもの学習や発達に望ましい変化をもたらす教育的行為をとることができる」という教師の信念をAshton（1985）は「教師効力感」と定義しているが、教員の専門性の向上に欠かせない資質として近年その重要性が指摘され、教員としての成長（中嶋・久坂，2018）や、教員のメンタルヘルス（平岡・乾原，2001）との関連など多様な研究がなされている。教職志望学生の教師効力感に関する研究では、主として教育実習の影響について検討されている（春原，2008；三島・山口他，2009；相澤・増田，2016；五十嵐・宮内，2020；高垣・吉村，2020）。教育実習という貴重な体験は実習生の教師効力感を高めていくためのきっかけを提供していること（今林・川畑他，2004）、教育実習不安が高い学生は、実習後も教師効力感を高めることができないこと（三島・安立他，2010）などの報告がされている。

このように教員養成段階から教師効力感を高めることを意識した指導を行うことは、教師の教科指導力や学級運営などの向上につながると考えられる。そこで、中学校・高等学校の保健体育教員の養成について、教師効力感の視点から学生の意識の特徴を明らかにすることを通し、保健体育教員の養成プログラムについて検討することが必要と考えられる。

また、令和2年現在、新型コロナウイルスの感染拡大が世界でも日本でも止まらず、多くの感染者が発生している。厚生労働省の推進で感染防止の3つの基本、身体的距離の確保やマスクの着用、手洗いが盛り込まれた新しい生活様式の実践が提唱され、教員養成を行う大学も、小・中・高等学校等の学校現場もこのような新たな課題への対応が余儀なくされている。このような今までにない特殊な状況下において行われた令和2年度の教育実習とその事前・事後指導の受講生の教師効力感の特徴を明らかにし、コロナ禍の中で行

われた教員養成プログラムについての検証を行う。

II. 目的

本研究では、春原（2007）の教育学部生用教師効力感尺度を参考に関連変数を加えた保健体育教員のための教師効力感に関する調査表を試作し、教育実習に伴う教員養成課程（保健体育）学生の教師効力感の特徴について明らかにすることを目的とする。

III. 方法

1. 調査対象

IPU環太平洋大学教職課程の「中学校・高等学校教育実習（保健体育）」の2020年度の受講生を調査対象とした。教育実習前の事前調査（2020年8月）と事後調査（2020年12月）の2回とも回答が得られた88名を分析対象とした（表1）。

表1 調査対象内訳

		学部			合計
		体育 学科	教育経営 学科	子ども発 達学科	
学年	3年	61	0	0	61
	4年以上	11	14	2	27
合計		72	14	2	88

調査の実施にあたっては、「調査は、教育実習前後の意識について調べ、教員養成カリキュラム検討の参考としていくことを目的としている」こと、「回答結果は調査研究以外に使われることはなく、回答結果が個人の成績や評価に関係することはない」ことを説明し、同意を得た上でwebのフォームに回答を入力するよう依頼した。

2. 調査内容

調査内容は、春原（2007）の教育学部生用教師効力感尺度、相澤・増田（2016）の教育実習前後のアンケート、大野木・宮川（1996）の教育実習不安尺度を参考に、2020年度の社会状況を鑑み新型コロナウイルスに関する項目も追加し、以下の4領域44項目より構成した（表2）。

- ① 教師効力感に関する質問項目：22項目
・教授・指導 11項目

- ・学級管理・運営 6項目
- ・生徒理解・人間関係形成 5項目
- ② 職業的自己意識：4項目
- ③ 教育実習不安：14項目
 - ・生徒関係 7項目
 - ・授業実践力 7項目
- ④ 新型コロナウイルスに関する不安：4項目

回答は①と②については「1. そう思わない」から「5. そう思う」の5件法で、③と④については「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答を求め、得点化した。

教育実習の前後で得点に差が見られるか検討を行うために、全体、学年別、学科別、進路別に対応のあるt検定を行った。分析にはSPSS Ver. 25を用いた。

表2 調査内容の質問項目

カテゴリー	番号	反転	質問項目
教師効力感	教授・指導	1	教授方法・教具についての知識や技術を持っている。
		2	生徒たちの学習活動をスムーズに進めるための授業展開ができる。
		5	生徒たちにわかりやすく発問することができる。
		9	授業で子どもがつまづいた時に、別の説明や例を提示することができる。
		12	わかりやすく正確に板書することができる。
		13	理解力のある生徒に発展的な課題を与えることができる。
		14	☆ 生徒の技能を伸ばす授業の技術を十分持っているとは思わない。
		17	わかりやすい教え方ができる。
		19	活動をスムーズに進めるための手順を作り上げることができる。
		24	どのようにすれば生徒たちの活動が能率よく進められるか知っている。
	21	授業で教えた内容を生徒たちが理解できたか評価することができる。	
	学級管理・運営	3	生徒達と一緒に学級内のルールを作り上げることができる。
		4	☆ 騒いだり、うるさくしたりする生徒を落ち着かせる自信がない。
		7	☆ 反抗的な生徒にどう対応したらよいかわからない。
		8	まとまりのあるクラスをつくる自信がある。
		11	学級内のコミュニケーションを活発にし、よりよい決定を作り出すことができる。
		16	問題のある子生徒に授業を妨害させないようにすることができる。
	生徒理解・人間関係形成	10	☆ 特別な支援を必要とする生徒にどのように関わればよいかわからない。
		18	☆ 生徒たちの中にすぐ溶け込めるか心配だ。
		23	生徒の心をつかむのが上手である。
		25	☆ 生徒との親密な人間関係をつくれるかどうか不安だ。
26		☆ PTAなど保護者と関わる行事はなんとなく気が重い。	
職業的自己意識	6	☆ 縦割り行事などで異なる学年の先生と関わるのが苦手である。	
	15	仕事で助けてほしいときに他の教員に手伝ってもらえる関係をつくることができる。	
	20	学校や社会の規則に基づいて、生徒たちを管理・指導することができる。	
	22	困ったことやわからないことがあれば他の教員に相談できる。	
教育実習不安	授業実践力	1	教え方が未熟で授業を聞いてもらえないのではないかと不安だ。
		2	うまく授業をすることができず取り乱しそうで不安だ。
		3	手際よく実技指導ができないのではないかと不安だ。
		4	生徒にわかりやすい授業ができるか不安だ。
		5	生徒の雑談が多くなり、收拾がつかなくなりそうで不安だ。
		6	授業中に予想外の質問がでたら、パニックになるのではないかと不安だ。
		7	生徒たちが自分の授業をきちんと理解してくれるか不安だ。
	生徒関係	8	生徒にいじめられるのではないかと不安だ。
		9	今までと違う環境なので適応できないかもしれないと不安だ。
		10	生徒たちとうまくやれているか不安だ。
		11	人前で話すこと自体が不安だ。
		12	授業の途中で失敗をして生徒にばかにされるのではないかと不安だ。
		13	生徒がなめてかかってくるのではないかと不安だ。
		14	学校側とうまくやれないのではないかと不安だ。
新型コロナに関する不安	1	☆ 新型コロナについて、自分が知らない間に感染しているのではないかと不安がある。	
	2	☆ 実習期間（前後も含む）に、新型コロナ感染予防のための生活の制限・制約を行うことに負担を感じる。	
	3	☆ 実習校で、生徒に新型コロナ感染予防の対応・指導を行うことに不安がある。	
	4	☆ 実習校で、新型コロナ感染予防に対応した授業の実践に不安がある。	

表3 オンラインによる授業方法の例

<A教員の事前指導の場合>	<B教員の事前指導の場合>
<p>1. Google Classroomにクラスを作成し学生を登録する。</p> <p>2. 指導案の提出スケジュールを示す。 (ア)当初予定していた模擬授業の3日前まで</p> <p>3. 指導案の提出を受け付け、添削する(一次提出)。 Microsoft Office Wordの校閲機能を用いる。</p> <p>4. 添削結果を本人にメールで返信すると共にGoogle Classroomのメンバーと共有する (ア)必要に応じてGoogle Hangouts Meetのビデオ会議システムを用いる。 ①使い方の例 ②高速インターネット環境が整わない学生に対しては電話等で対応可能。 ③ビデオ会議を取り入れなければ通信量の問題はほぼ気にしなくても良い。ただし、複数名を同時に指導しようと思えば、ビデオ会議システムが便利である。</p> <p>5. 期限を定めて修正した指導案を提出させ、再び添削する(二次提出)。 (ア)一次提出から2, 3日以内を目安とする。</p> <p>6. 模擬授業の実施可能性が開かれれば模擬授業を実施する。できない場合は、別の単元の指導案を作成させる。 (ア)保健分野, 体育分野を合わせて、学生1人あたり2~3種類を作成させる予定</p>	<p>【事前】 ①指導を受ける学生(3人)は、12:00までに指導案を指定のドロップボックスに入れる。</p> <p>【導入】 ①13:00~13:05までにテレビ会議システムに入るようにする。(欠席者は事前にグループLINEで報告する。) ②13:05から画面上に顔が見えるようにして呼名とともに一言ずつ喋らせて出席をとる。(通信確認)</p> <p>【展開】 ③教師のデスクトップ画面を共有して、指導する学生の指導案が見られるようにする。 ④ワードの校閲機能を用いて教師の添削やコメントの趣旨を説明する。 ⑤精度の高い指導案は段落ごとに読ませ指名した学生の意見を聞くようにする。 ⑥区切りが良いところでチャットにコメントを書かせるようにして理解度を確認する。 ⑦Googleクラスルームに指導案の例、学習指導要領(文部科学省)、指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料(国立教育政策研究所)などを参考資料として載せておいて、随所に説明のために用いる。 ※一番学生からのリアクションがよかったのが実際の授業動画を用いた説明であった。</p> <p>【まとめ】 ⑧チャットに今日の感想を書かせて、それに応答する。 ⑨画面上で顔が見えるようにして、一人ずつ挨拶をしてから退出するようにする。 ※チャットでふざけることはないが、積極的に意見が出せないで「ないです。」との回答を控えるように指示し、アドバイスや気づきを積極的に書くように促すことで少しずつ改良してきたところである。 ※どの領域を指導させて頂くかというのが見通しの立ちにくい状況である。そのため、どこを指導することになっても協力し合えるよう共有フォルダに指導案を入れるようにした。 ※テレビ会議中の指導では、一人の指導案を全て指導することが毎回繰り返されると間延びしてしまうので、学生の指導案を使って生徒観・学習観などのテーマごとの書き方を順に説明していくことで90分に3人ずつの指導を継続的に行っている。</p>

3. 「中学校・高等学校教育実習(保健体育)」および「教育実習事前事後(保健体育)」の概要

(1) 例年の取り組みの概要

IPU環太平洋大学の「中学校・高等学校教員養成課程(保健体育)」は、体育学科及び教育経営学科、こども発達学科の学生のうち、保健体育教諭免許状の取得を希望する学生が選択する形となっている。体育学科の学生は、中学校・高等学校の保健体育教諭を主免とし、3年次あるいは4年次に「中学校・高等学校教育実習(保健体育)」を履修する。教育経営学科の学生は、小学校教諭を主免とし3年次に小学校教育実習を行った後、4年次に副免の「中学校・高等学校教育実習(保健体育)」を履修する。こども発達学科も幼稚園教諭を主免とし3年次に幼稚園教育実習を行った後、4年次に副免の「中学校・高等学校教育実習(保健体育)」を履修することを原則としている。

例年の「教育実習事前事後(保健体育)」は、5月から教育実習が始まる学生もいるため、実習前年度の3月から授業を開始している。授業の主な内容は、「教育実習に臨む上での心構え」、「実習手引き使用の仕方」、「実習日誌の書き方」、「実際の教育実習について」、「学習指導案の書き方」までを4時間かけて3月中に行った後、模擬授業を最低3回程度は実施した上で教育実習に送り出すようにしている。模擬授業では

担当教員1人に対して学生12~13人の班を作り、1時間に3人~4人が模擬授業を行い、担当教員が指導している。さらに7月中旬には、7月上旬までに教育実習を終えた学生を集め、教育実習の振り返りと事後指導を実施している。後期は、12月中旬に後期教育実習を終えた学生を集めて、事後指導を行っている。

(2) 令和2年度の取り組みの概要

令和2年度のコロナ禍での「中学校・高等学校教育実習(保健体育)」および「教育実習事前事後(保健体育)」は、通常年度とは相当相違する授業となった。新型コロナウイルス感染拡大とその防止対策の影響を受け、本学でも2月21日には3月開催予定のオープンキャンパスの中止、2月25日には学位授与式の式典・謝恩会の中止、3月18日には入学式の中止、全学年オリエンテーション、授業開始日の変更(5月11日)が決定されるという、今まで経験したことない令和2年度を迎えることとなった。4月4日からは大学内の一切の立ち入りが禁止され、5月11日授業開始日からも基本的には学生は登校禁止、教員も厳しい規制・管理の中での勤務(基本的にはテレワーク)となり、対面で授業すること(模擬授業指導)が最も重要な教育実習事前指導に大きな影響を与えることになった。

教育実習参加学生の実習期間についても、3月末の時点では前期実習参加予定学生が151名、後期実習参

加予定学生が24名であったが、5月上旬になっても実習期間が決定しない実習校もあり、実習校との連絡対応に追われた。結局、5月末には前期教育実習参加者（7月上旬までに参加）が予定者151名のうち15名であることがわかり、ほとんどの地域の学校が前期実習を後期実習に変更したことが判明した。

1) オリエンテーション

上記のような状況下であったが、3月末の時点ではまだ100名以上が前期に教育実習に参加する予定であったため、通常3月末に実施していた「教育実習事前事後（保健体育）」授業のオリエンテーションを4月6日に実施した。期日は4月6日（月）3・4限で、感染症予防対策のため、5月と6月に教育実習に参加するグループと7月以降に参加するグループに分け、前期グループのみを対象とした。前期グループ126名を大講義室1（90名程度）と講義室12（30名程度）に分けてオリエンテーションを実施した（手指アルコール消毒、全学生マスク着用、常時換気を徹底）。内容は教育実習に向けての心構え、手続き、班毎の顔合わせなどであった。後期グループについては、8月の第三週から第四週に、各班の担当者が実習開始期間に合わせて、大学に登校させるかオンラインで、オリエンテーションを実施した。

2) 授業の実施方法

令和2年度の「教育実習事前事後（保健体育）」の授業の方法は、大学への立ち入りが禁止されたため、事前指導は担当教員21名が、各担当班12～13人の学生に対してオンライン授業で実施することになった。授業内容は、①指導案作成：4/7（火）～4/14（火）の期間にリモートまたはオンデマンドで実施した。②模擬授業実施・指導：大学の授業開始時期が5月の連休明けに変更されたため、各班の担当者が4/15（水）～5/8（金）の期間を使ってオンライン授業を実施した。1人3回は模擬授業が実施できるようにすることが毎年の目標であったが、この当時はオンライン授業にすぐに切り替えられる教員とそうでない教員がおり、担当教員の中にはオンライン授業を実施するのに相当苦勞した教員が見受けられ、学生一人の模擬授業回数は例年より少なくなった。後期グループについては、各班の担当教員が実習開始期間に合わせて、学生を大学に登校させるかオンラインで、オリエンテーションと模擬授業指導を実施した。担当学生を大学に登校させる場合は、3人以下に限定した上で、事前に教務課と総務課に連絡し、登校する学生の氏名、通学方法、使用教室等を申請し、許可制で授業を実施

した。担当教員が大学の入口まで学生を迎えに行き、学生が帰る時にはまた教員が大学の出口まで送るという厳重な感染予防、管理体制で実施した。表3にオンライン授業の工夫の参考例を2例示す。事後指導については、例年は実習前期グループと後期グループに分けて実施していたが今年度は前期、後期グループ一緒に、12月7日に実施した。

3) 実習校訪問

実習校訪問については、例年は参加学生の「実習受け入れの御礼」、「実習生の様子の聞き取り」、「広報活動」を目的として、実際に実習校を訪問していたが、今年度はコロナ禍であることを鑑みて、参加学生の実習前後のご挨拶を電話でのみ行い、実習時に問題が発生した時のみ実際に訪問することとした。

IV. 結果

1. 教師効力感

教育実習前後の教師効力感の得点を表4に示す。得点が高いほど教師効力感が高いことを示している。全体の回答について、下位領域の「教授・指導」と「学級管理・運営」で教育実習後に若干得点の上昇が見られたが、教育実習の時期（前後）と下位領域に有意差は見られなかった。

表4 教育実習前後の教師効力感の得点

			教育実習前	教育実習後	有意性
教師効力感	教授・指導	Mean	3.29	3.42	n.s.
		SD	0.61	0.59	
	学級管理・運営	Mean	3.52	3.63	n.s.
		SD	0.73	0.63	
	生徒理解・人間関係形成	Mean	3.35	3.35	n.s.
		SD	0.75	0.77	

各質問項目の回答では、教育実習前で「教授・指導」の効力感が高かった項目は、「授業で教えた内容を生徒たちが理解できたか評価することができる。」の3.56点、次いで「授業で子どもがつまづいた時に、別の説明や例を提示することができる。」3.45点であった。低かった項目は、「生徒の技能を伸ばす授業の技術を十分持っているとは思わない。（反転）」2.89点、次いで「どのようにすれば生徒たちの活動が能率よく進められるか知っている。」3.13点であった。「学級管理・運営」の効力感が高かった項目は「生徒達と一緒に学級内のルールを作り上げることができる。」3.70点、低かった項目は「反抗的な生徒にどう対応

したらよいかわからない。(反転)」3.32点であった。「生徒理解・人間関係形成」の効力感が高かった項目は、「生徒たちの中にすぐ溶け込めるか心配だ。(反転)」3.51点、低かった項目は「PTAなど保護者と関わる行事はなんとなく気が重い。」3.13点であった。

教育実習後の回答については、「教授・指導」の効力感が高かった項目は、「授業で教えた内容を生徒たちが理解できたか評価することができる。」3.58点、次いで「生徒たちの学習活動をスムーズに進めるための授業展開ができる。」3.56点であった。低かった項目は、「生徒の技能を伸ばす授業の技術を十分持っているとは思わない。(反転)」2.97点、次いで「どのようにすれば生徒たちの活動が能率よく進められるか

知っている。」3.22点であった。「学級管理・運営」の効力感が高かった項目は「生徒達と一緒に学級内のルールを作り上げることができる。」3.90点、低かった項目は「反抗的な生徒にどう対応したらよいかわからない。(反転)」3.41点であった。「生徒理解・人間関係形成」の効力感が高かった項目は、「生徒たちの中にすぐ溶け込めるか心配だ。(反転)」3.66点、低かった項目は「PTAなど保護者と関わる行事はなんとなく気が重い。」3.22点であった。

次に、学年別(3年生, 4年生以上)、学科別(体育学科, 教育経営学科)、進路別(教員, 公務員, 企業, その他)の結果を図1-1~図1-3に示す。なお、図1-1のAは「教授・指導」、Bは「学級管

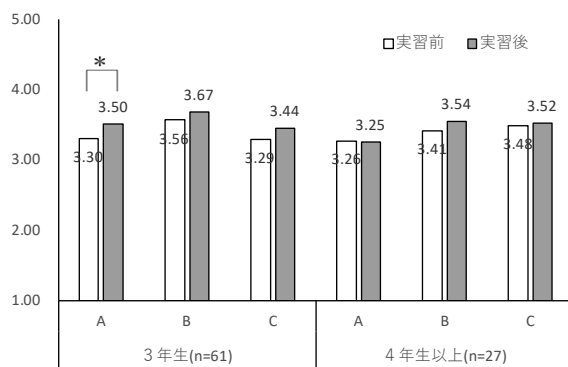


図1-1 教育実習前後の教師効力感の得点(学年別)

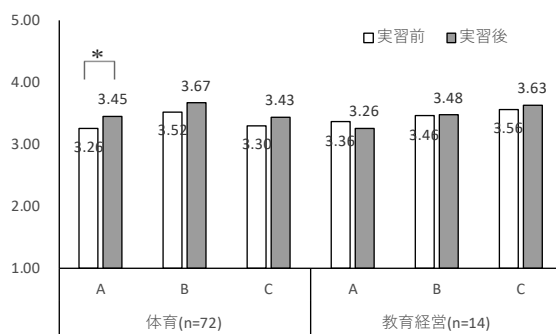


図1-2 教育実習前後の教師効力感の得点(学科別)

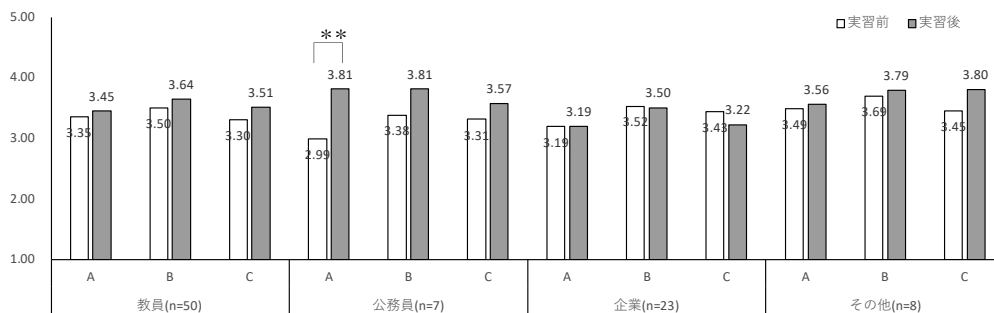


図1-3 教育実習前後の教師効力感の得点(進路別)

理・運営」, Cは「生徒理解・人間関係形成」の教師効力感の下位領域を示している。下位領域「教授・指導」について, 学年別では3年生で, 学科別では体育学科で, 進路別では公務員で, 教育実習前よりも教育実習後に有意に得点が高くなっていた(順に, $t=-2.090, p<0.05$; $t=-2.148, p<0.05$; $t=-3.813, p<0.01$)。

2. 職業的自己意識

教育実習前後の職業的自己意識の得点を表5に示す。得点が高いほど職業的自己意識が高いことを示している。全体の回答について教育実習の時期による有意差は見られなかった。

表5 教育実習前後の職業的自己意識の得点

		教育実習前	教育実習後	有意性
職業的自己意識	Mean	4.04	4.12	n.s.
	SD	0.68	0.61	

教育実習前の回答で自己意識が高い項目は、「困ったことやわからないことがあれば他の教員に相談できる。」4.31, 低い項目は「学校や社会の規則に基づいて, 生徒たちを管理・指導することができる。」3.82点であった。

教育実習後の回答で, 自己意識が高い項目は「困ったことやわからないことがあれば他の教員に相談できる。」4.39点, 低い項目は「学校や社会の規則に基づいて, 生徒たちを管理・指導することができる。」3.90点であった。

学年別(3年生, 4年生以上), 学科別(体育学科, 教育経営学科), 進路別(教員, 公務員, 企業, その他)の結果を図2-1~図2-3に示す。いずれも教育実習の時期による有意差は見られなかった。

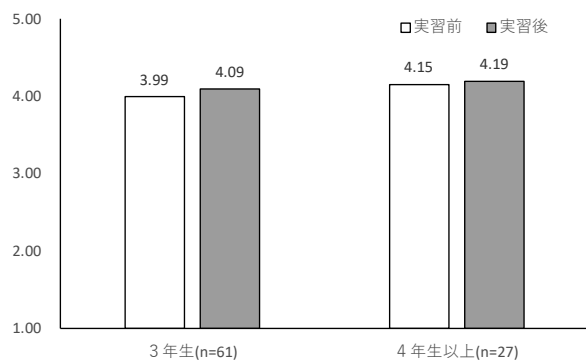


図2-1 教育実習前後の職業的自己意識の得点(学年別)

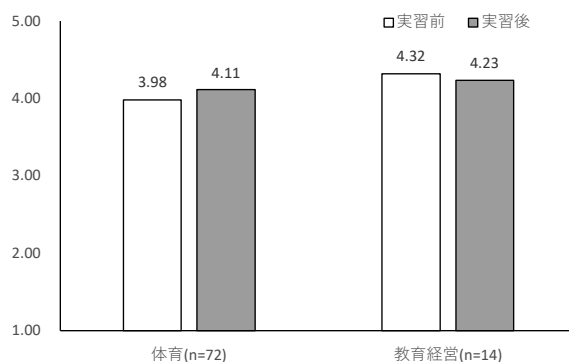


図2-2 教育実習前後の職業的自己意識の得点(学科別)

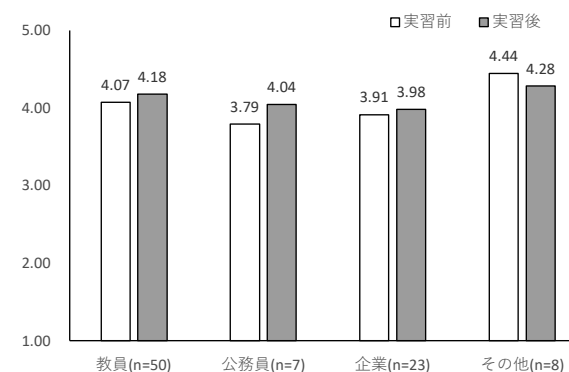


図2-3 教育実習前後の職業的自己意識の得点(進路別)

3. 教育実習不安

教育実習前後の教育実習不安の得点を表6に示す。得点が高いほど不安が強いことを示している。全体の回答では下位領域の「生徒関係」では有意差は見られなかったが, 「授業実践力」は, 教育実習前よりも教育実習後に有意に得点が低かった($t=3.524, p<0.01$)。

教育実習前の回答で「授業実践力」の不安が高い項目は, 「生徒の雑談が多くなり, 收拾がつかなくなりそうで不安だ。」3.68点, 低い項目は「授業中に予想外の質問がでたら, パニックになるのではないかと不安だ。」が3.00点であった。「生徒関係」の不安が高い項目は「今までと違う環境なので適応できないかもしれないと不安だ。」2.86点, 「生徒にいじめられるのではないかと不安だ。」1.82点であった。

教育実習後の回答で「授業実践力」の不安が高い項目は, 「生徒の雑談が多くなり, 收拾がつかなくなり

表6 教育実習前後の教育実習不安の得点

		教育実習前	教育実習後	有意性	
実習不安	生徒関係	Mean	2.39	2.28	n.s.
		SD	0.83	0.84	
	授業実践力	Mean	3.39	2.98	$p<0.01$
		SD	0.87	0.87	

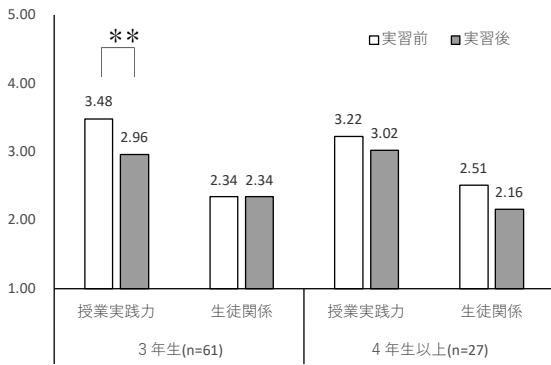


図3-1 教育実習前後の教育実習不安の得点 (学年別)

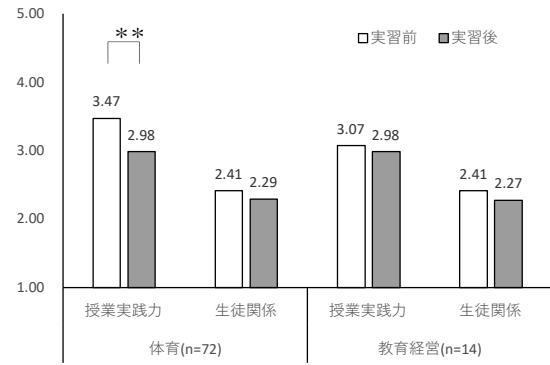


図3-2 教育実習前後の教育実習不安の得点 (学科別)

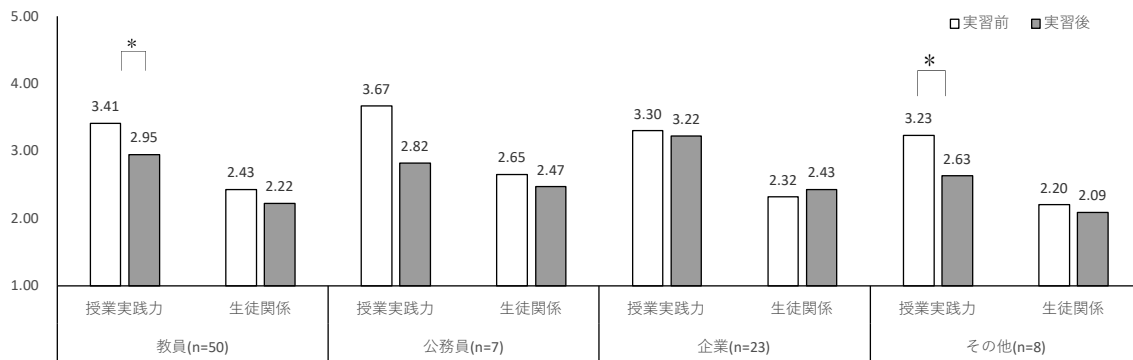


図3-3 教育実習前後の教育実習不安の得点 (進路別)

そうで不安だ。」3.38点, 低い項目は「うまく授業をすることができず取り乱しそうで不安だ。」と「授業中に予想外の質問がでたら, パニックになるのではないかと不安だ。」が2.59点であった。「生徒関係」の不安が高い項目は「今までと違う環境なので適応できないかもしれないと不安だ。」2.64点, 「生徒にいじめられるのではないかと不安だ。」1.83点であった。

次に, 学年別 (3年生, 4年生以上), 学科別 (体育学科, 教育経営学科), 進路別 (教員, 公務員, 企業, その他) の結果を図3-1~図3-3に示す。下位領域「授業実践力」について, 学年別では3年生で, 学科別では体育学科で, 進路別では教員とその他で, 教育実習前よりも教育実習後に有意に得点が低くなっていた (順に, $t=3.613, p<0.01$; $t=3.724, p<0.01$; $t=2.962, p<0.01$; $t=2.472, p<0.05$)。

4. 新型コロナウイルスに関する不安

教育実習前後の新型コロナウイルスに関する不安について回答者全体の得点を表7に示す。得点が高いほど不安が強いことを示している。全体の回答では教育実習の時期による有意差は見られなかった。

表7 教育実習前後の新型コロナウイルスに関する不安の得点

		教育実習前	教育実習後	有意性
新型コロナウイルスに関する不安	Mean	2.80	2.66	n.s.
	SD	0.98	0.93	

教育実習前の回答で不安が高い項目は, 実習校で, 「新型コロナ感染予防に対応した授業の実践に不安がある。」3.02点, 低い項目は「実習期間 (前後も含む) に, 新型コロナ感染予防のための生活の制限・制約を行うことに負担を感じる。」2.56点であった。

教育実習後の回答で不安が高い項目は, 「新型コロナについて, 自分が知らない間に感染しているのではないかと不安がある」2.89点, 低い項目は「実習校で, 生徒に新型コロナ感染予防の対応・指導を行うことに不安がある。」2.49点であった。

次に, 学年別 (3年生, 4年生以上), 学科別 (体育学科, 教育経営学科), 進路別 (教員, 公務員, 企業, その他) の結果を図4-1~図4-3に示す。学年別では4年生で, 教育実習前よりも教育実習後に有意に得点が低くなっていた ($t=2.615, p<0.05$)。

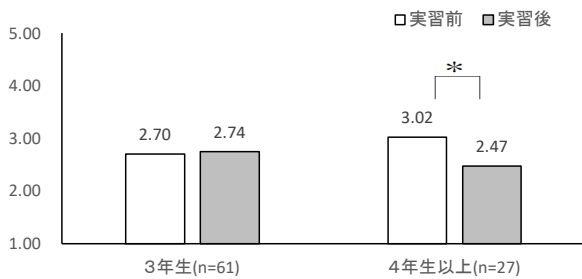


図4-1 新型コロナウイルスに関する不安の得点(学年別)

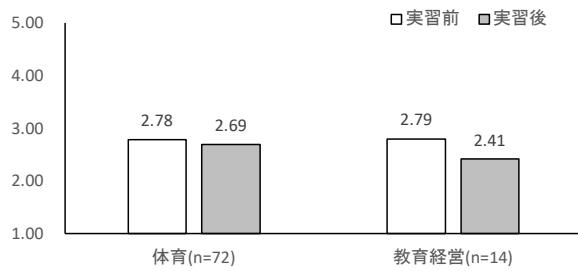


図4-2 新型コロナウイルスに関する不安の得点(学科別)

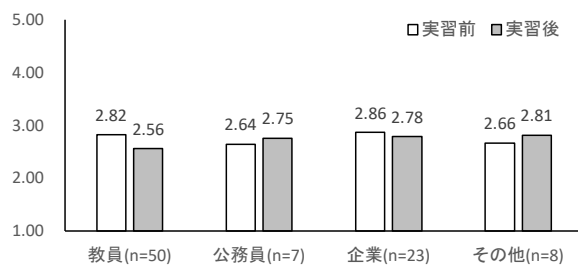


図4-3 新型コロナウイルスに関する不安の得点(進路別)

V. 考察

本研究では、コロナ禍の下で行われた教育実習および事前・事後指導に伴う本学教員養成課程(保健体育)学生の教師効力感や関連する変数の特徴について検討した。

本学の教員養成課程(保健体育)学生は、教師効力感の下位領域「教授・指導」の得点が、学年別では3年生で、学科別では体育学科で、進路別では公務員志望で、教育実習前よりも教育実習後に向上していた。また、教育実習不安については下位領域の授業実践力に関する不安が教育実習後に低減していた。新型コロナウイルスに関する不安は4年生で教育実習後に低減していたが、職業的自己意識については教育実習の前後で特に変化は見られなかった。

先行研究と質問項目数や評定段階が異なるため単純に比較することはできないが、五十嵐・宮内(2020)高垣・吉村ら(2020)の研究では、教育実習前の教師

効力感の平均得点が2点台であるのに対し、本研究では3点台と教育実習前の教師効力感の得点が比較的高い傾向が見られた。教育実習前の調査時期が8月であり、すでに事前指導がある程度進められていた時期であったため、事前指導を通して学生の教師効力感の向上や教育実習不安の低減がなされていた可能性が考えられる。2020年度は、コロナ禍でのオンライン授業という教育実習事前指導の授業方法の変更が強いられたものの、制約がある中でもでき得る授業の工夫をすることにより、学生の教師効力感の高さや教育実習不安の低さという成果に繋がった可能性も考えられる。

今後は、教育実習事前指導および教育実習を通して教師効力感が向上しなかった学生へのフォローについて検討する必要がある。また、教育実習事前指導の前後での教師効力感の比較、コロナ禍以前の教師効力感との比較、保健体育以外の教員養成課程学生の教師効力感との比較などを通し、感染予防と学びの両立を目指した教員養成課程(保健体育)のカリキュラムを検討していくことが必要とされよう。

引用・参考文献

- 相澤雅文・増田優子(2016)教育実習が与える教師効力感への影響—教育実習前後のアンケート調査を通して—。日本教育心理学会第58回総会論文集, 382.
- Ashton, P.T. (1985) Motivation and the teacher's sense of efficacy. *Research on motivation in education*, 2, 141-174.
- 中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(答申).
- 春原淑雄(2007)教育学部生の教師効力感に関する研究—尺度の作成と教育実習にともなう変化—. *日本教師教育学会年報* 16, 98-108.
- 春原淑雄(2008)教育実習体験が教育学部生の教師効力感に及ぼす影響. *学校教育学研究論集*17, 17-26.
- 平岡永子・乾原正(2001)教師のバーンアウトと教師効力感の関係について. *日本教育心理学会総会発表論文集* 43 (0).
- 平田佳弘・京林由季子・吉岡利貢 他(2018)中学校・高等学校教育実習(保健体育)の実習状況と実習生の意識. *環太平洋大学研究紀要* 12, 177-182.
- 平田佳弘・京林由季子・吉岡利貢・降屋丞・長谷川晃一(2019)中学校・高等学校教育実習(保健体育)の実施状況と実習生の意識—第2報—. *環太平洋大学研究紀要* 14, 73-81.
- 五十嵐亮・宮内孝(2020)教育実習及び事前指導を通

- した教師効力感, 教育実習不安及び教職意識の変容. 南九州大学人間発達研究 10, 13-22.
- 今林俊一・川畑秀明・白尾秀隆 (2004) 教育実地研究に関する教育心理学的研究 (6) 教員養成学部生の教師効力感の変容について. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 14, 85-99.
- 三島知剛・山口あゆみ・森敏昭 (2009) 教育実習生の教職志望度に関する研究: 実習生の授業・教師イメージ・教師効力感・実習の自己評価に着目して. 学習開発学研究 (2), 11-18.
- 三島知剛・安立大輔・森敏昭 (2010) 教育実習生の実習前後における学習の継続意志の変容-実習前後の教師効力感の変容・実習の自己評価に着目して. 学習開発学研究 (3), 91-99.
- 大野木裕明・宮川充司 (1996) 教育実習不安の構造と変化. 教育心理学研究 44, 454-462.
- 高垣マユミ・吉村麻奈美・牛島順子・田爪宏二 (2020) 女子大学生の教育実習における教師効力感と不安についての分析. 津田塾大学紀要 52, 59-72.
- 渡邊駿太・中西良文 (2017) 日本における教師効力感に関する研究の動向と展望. 三重大学教育学部研究紀要. 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践 (68), 245-254.